

「枚方漢人」の移住伝承の歴史的前提

真鍋成史

はじめに

大阪府交野市森遺跡では、一九八六年以来の市道建設に先立つ発掘調査で、古墳時代中・後期の鍛冶関連遺構・遺物を多数確認している。そして山陰系の鼓形器台、祭具に使用されたミニユチュア鉄斧などが出土している。

私は報告書作成過程で、森遺跡の鍛冶操業を掌握していた肩野物部氏が製鉄遺跡の多い岡山県津山市で出雲と関係の深い大穴持命を祀っていた伝承やその先行研究を紹介した。そして森遺跡の西側を流れる天野川下流域にあり、物部氏の祖・伊香色雄に係る¹⁾、『和名抄』の伊香郷に比定の大坂府枚方市伊加賀が『播磨国風土記』(以下『風土記』と略す)揖保郡条に載る佐比(小刀・鋤などの鉄製品)祭祀に関連した枚方漢人(渡来系鍛

冶工)の本貫地であることなどを述べている。²⁾

また、枚方里の鍛冶工の移動目的地は兵庫県揖保郡太子町のほか、その先の岡山県津山市の可能性も検討した。

その後、三〇年が経過し、これら四市町において、新たな考古学的調査成果も蓄積されてきている。中でも森遺跡では、六世紀以降になると初期官営工房³⁾が確認され、後の飛鳥池遺跡や平城京などの官営工房の先駆けとなるなど、五世紀から始まる森遺跡の鍛冶操業は、六世紀前半が大きな画期であることがわかってきた。津山市周辺でも肩野物部氏伝承が多数存在し、周辺には製鉄遺跡が分布していることも明らかになってきた。

本論はそれらを踏まえ、肩野物部氏や枚方漢人に関わる伝承が、なぜ美作と播磨においてみられるのか、継体朝以降の倭王権による地域編成のあり方⁴⁾とも関連づけて、その歴史的前提について考

えてみたい。

一、美作における肩野物部伝承について

まず本節では、古代の美作の肩野物部氏をめぐ
る中山神社の伝承⁽⁵⁾について、改めて取り上げてみ
たい。肩野物部乙磨は中山神の出現と賭け事に負
けたため土地を同神に譲り、それにより大穴持命
祭祀(図1)が衰えたことを妬んだため、中山神
の祟りにあつてしまい、その後、岡山県久米郡久
米南町から岡山市北区建部町の誕生寺川流域への
移住をせざるを得なくなったという内容である。
現在、中山神社の主神は鏡作命、配神は石凝姥命
と天糠戸命である。

この肩野物部氏については製鉄と関係していた
とする考察⁽⁶⁾がなされてきた。同氏が中山神に譲つ
た社地周辺は『古今和歌集』に記された「まがね
吹く⁽⁷⁾製鉄」の場所で、実際に製鉄遺跡が数多く
確認されている。

これまでの調査により津山市周辺と誕生寺川流
域では、肩野物部氏が移住したとする奈良時代を



図1 旧国司社跡にたつ祝木のケヤキ
(津山市中山神社南隣、乙磨の大穴持命祭祀場所)

境に、製鉄遺跡の分布域も移っていく。中山神社
の社地は元々乙磨の屋敷地で、中山神に譲った後
もすぐ近くで大穴持命を祭祀していた(図1)。
そして移住先では、乙磨が創建に関係したとする
初山神社では大穴持命、志呂神社・厨神社では事
代主神など出雲系を祭神として祀っている。

次に肩野物部伝承地周辺には金属神とされる天目一箇神を祀る神社も分布していることに注目したい。一カ所目は津山市里公文の高津神社であるが、元は近くの炭焼神社から移したとされるが、付近には岡山県史跡で六世後半という日本最古の砂鉄製鉄跡の大蔵池南製鉄遺跡と肩野物部の屋敷地伝承地、渡来系遺物の出土する稼山古墳群がある。そして稼山南麓まで流れる打穴川を遡った美咲町打穴上の宮代神社が二カ所目で、周辺には製鉄遺跡が分布する。打穴上の東側へ山道を下れば肩野物部伝承が多い誕生寺川にでる。

肩野物部氏が大穴持命を祭祀していた理由については、奈良県桜井市の三輪山に鎮座する大穴持命と同一神の大物主命と物部氏とのつながりから理解できるとする。⁹⁾確かに、三輪山の伝承をみていくと、『日本書紀』(以下『紀』と略す)神代上第八段一書(六)は大穴持命の「幸魂・奇魂」により三輪山に鎮まることを望んだとされ、『古事記』(以下『記』と略す)にも同様の伝承が載っている。その麓にある奈良県桜井市の大神神社は、『延喜式』で「大神大物主神社」と記載されるな

ど、大穴持命の別名¹⁰⁾の大物主命の信仰が古くからあった。

『紀』崇神天皇五年条や『古事記』では三輪山の物部主命の祟りにより疫病は流行したため、大田田根子を祭主とし、物部連の祖である伊香色雄を「神班物者」に任命した記事がみえる。これは地方の諸豪族の神宝を取り上げて、代わりに大和で作った祭祀に必要な祭具を班り、それで彼らの神を祭らせたことを意味するとの指摘¹¹⁾は極めて示唆に富んでいる。

『古語拾遺』ではこの時に天目一箇神の末裔が剣を造ったとする伝承を載せ、筑紫国・伊勢国の忌部氏の祖と記している。天目一箇神は『紀』神代下第九段一書によれば国譲りの時に、大穴持命を祀るための祭具製作を行う「作金者」として指名され、『古語拾遺』天岩戸段ではこの時に雑刀・斧と鉄鐸を作ったとする。以上のことから佐比祭祀と天目一箇神の関連がうかがえよう。

考古学調査からも、三輪山西麓に広がる纏向遺跡の一〇二次調査の勝山古墳周溝SK〇四からは鍛冶関連遺物に加えて鉄鏃や鉄片などの鉄器が出

土している(図2)。鉄器は軟鉄を使用している。出土地点から実用利器ではなく祭祀に使用されたと指摘される。同一の遺構内から陶質土器も出土している。同様に纏向遺跡四二・五七・八〇・九〇・一一一・一五五・一七四・一八九・二〇〇次調査の各地点で古墳時代前期の鍛冶関連遺物が出土している。

私はその多くで佐比祭祀のための鉄製祭具を製作していたのではとみている。また纏向遺跡のすぐ西方低地は興福寺領出雲荘、『紀』仁徳天皇三一年条の倭屯田で、その司として淤宇宿禰もみえるなど出雲との関係が深い場所でもある⁽¹³⁾。

近年の再整理で、纏向遺跡の北五キロにある石上神宮と接する布留遺跡においても古墳時代前期に遡る鍛冶関連遺物が出土していることがわかった。特徴は、纏向遺跡と相似した断面が蒲鉾状の羽口の存在で、布留遺跡でも佐比祭祀のための鉄製祭具製作を開始したのであろう。

これら二天皇の時代の佐比祭祀に関する伝承から、美作の肩野物部氏が穴持命を祭祀していたことや周辺に天目一箇神を祀る神社配置の意味は、

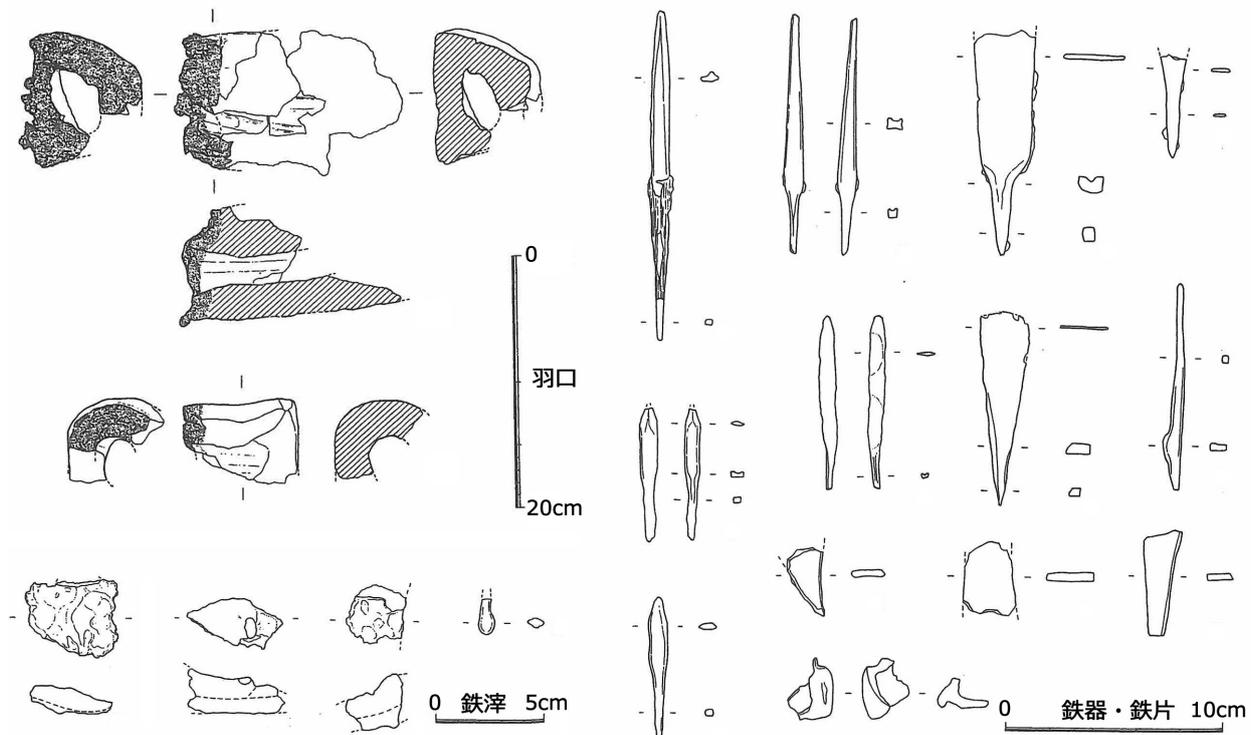


図2 纏向遺跡102次調査出土鍛冶関連遺物と祭具用鉄器

大穴持命への祭祀を石上神宮への引き継いだ物部氏の「神班物者」としての役割から読み解くことができよう⁽¹⁴⁾。そして製鉄が開始される六世紀後半以降は製鉄工も佐比祭祀を行ったと考えられる。

この祭祀の開始は中国山地での初期製鉄技術の導入と深く関係する。つまり美作に派遣された肩野物部氏が、当地において渡来系鍛冶技術を応用し製鉄を開始、それに付随する形で、『記紀』・『古語拾遺』に載る中央伝承にしたがい、大穴持命祭祀を持ち込んだと考える。

当然、大和 美作間の河内や播磨にもその伝播の痕跡があるわけで、次節でみていきたい。

二、『播磨国風土記』の「枚方漢人」伝承について

『風土記』揖保郡条によれば応神朝頃、神尾山に在る出雲之大神（比売神）が出雲国の人の通行を妨げるので、佐比を作つて、佐比岡に祀つて鎮めようとしたが神は満足しなかった。その後、河内国茨田郡枚方里の漢人が来て山の辺に住んで神を祀つたところ、神は鎮まつたと記している。

考古学資料からみてこの佐比祭祀については、

三輪山祭祀が陶邑の大田田根子伝承と関連づけられており、五世紀前半に朝鮮半島から伝わった鍛冶技術で「神への捧げ物」として製作されたという指摘⁽¹⁶⁾、鉄製祭具と鍛冶関連遺物とが集落内外の祭祀遺構で発見される例が五世紀後半に増加するという指摘⁽¹⁷⁾などから、五世紀には入り渡来系鍛冶工により各地へ佐比祭祀が拡散したと考えられる。そして、それらの遺跡の一つに神戸市西区伊川谷町の白水遺跡第三次調査S X O一祭祀土坑⁽¹⁸⁾も含まれており、播磨にも及んでいることが確認できる。

『風土記』の佐比岡に比定される坊主山⁽¹⁹⁾は、養和元年（一一八一）製作の『播磨国内鎮守大小明神社記』に佐比明神を祀つたと記されている。また五世紀中頃から築造が始まった坊主山古墳群からは多数の鉄製品が出土し⁽²⁰⁾、佐比祭祀との関連がうかがえる。『風土記』が出雲との関連伝承が多いことから、特にこの伝承については「鉄の流通をめぐる出雲・播磨間のつながりがあった⁽²¹⁾」と考えられる。

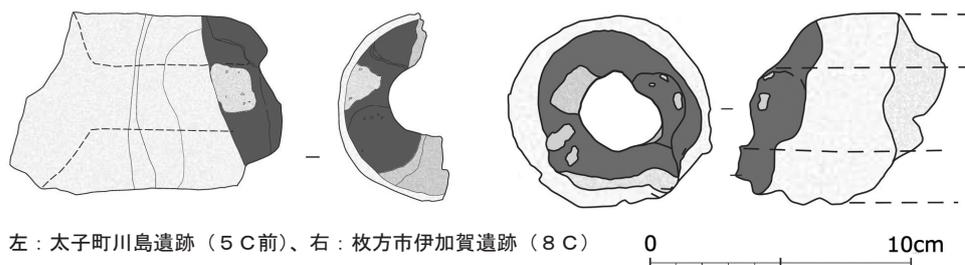


図3 両枚方里における渡来系鍛冶羽口

る八世紀代の鍛冶関連遺物も出土している。そして、揖保郡枚方里及び周辺の遺跡においても五世紀代、六世紀後半以降の鍛冶関連遺物が出土、羽口は両枚方里ともに渡来系鍛冶工系譜の羽口（図

次に茨田郡枚方里は『紀』
 崇神天皇五年条や『記』同
 天皇条にみえる大穴持命への
 「神班物者」である伊香色雄
 との関係や、『延喜式』記載
 の意賀美神社があり、末社に
 は大物主神を祀る琴平神社、
 素戔嗚尊を祀る須賀神社、大
 国主神を祀る日吉神社が明治
 時代に枚方里の各所から集め
 られているなど、出雲系諸神
 への祭祀が盛んな場所である。
 また一九九一年の拙稿時で
 は確認できなかったが、その
 後、茨田郡枚方里内の伊加賀
 遺跡の発掘調査で、五世紀に
 加え、『風土記』成立時であ

3⁽²⁴⁾ を使用していることが明らかになってきた。
 『風土記』には直接の記載はないものの、考古
 学成果を踏まえると美作の事例と同様に、「作金
 者」として佐比祭祀にも関与した可能性が強いこ
 とが示唆される。渡来系鍛冶技術や祭祀の伝播に
 は、播磨側での屯倉設置のため河内側の茨田屯倉
 から漢人を徴発した⁽²⁵⁾ ことによるものだろう。
 近年、太子町の吉福西遺跡で一〇世紀に行なわ
 れた鋤先を立てた祭祀遺構を確認できたが（図4）、
 同様の祭祀は大阪府枚方市の楠葉東遺跡と岡山県
 真庭市の上野火葬墓、加西市宮の谷遺跡、さら
 は京都市の平安京内でも確認されている⁽²⁶⁾。これら
 鋤先を立てる祭祀は、平安時代になっても枚方漢
 人が持ち込んだ佐比祭祀が変化しながらも行われ
 ていたことを示しているであろう。
 この鍛冶工が祀った神として、「鉄山必要記事
 （鉄山秘書）」の中にも「作金者」として記される
 天目一箇神⁽²⁷⁾が候補として上がる。同神は『風土記』
 託賀郡条にみえる天目一命や、『延喜式』記載の
 兵庫県西脇市大木町天目一神社と佐用郡佐用町
 東徳久の天一神玉神社の祭神でもある。

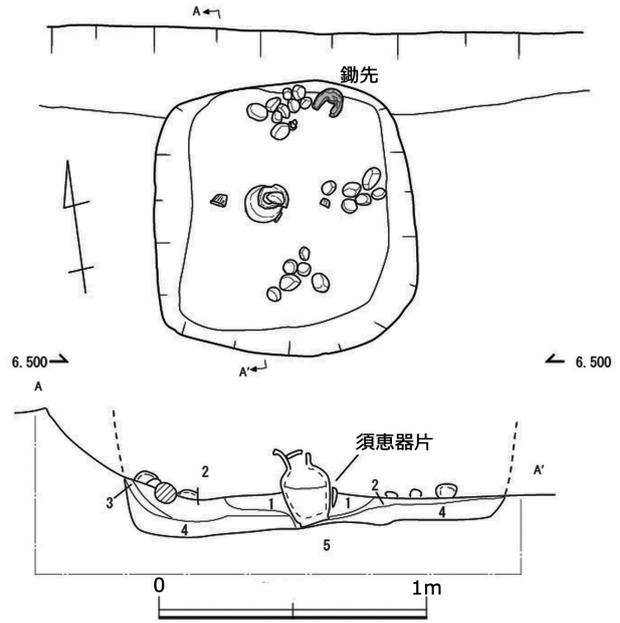


図4 吉福西遺跡佐比（鋤先）祭祀

が確認されている。木炭窯の熱残留磁気測定結果で七世紀後半との結果が報告されている。また『風土記』讚容郡条に製鉄記事が載る鹿庭山北麓にある佐用郡佐用町仁方の神庭神社地内でも製鉄関連遺物が採取されているが、⁽²⁸⁾ここでも祭神は天目一箇神である。

近世のたたら吹き製鉄において祀られた金屋子神が天目一箇神にとって変わったとする指摘⁽²⁹⁾も、先に述べた初期製鉄に鍛冶技術を応用したとすれば妥当な見解だろう。また『風土記』では大穴持

天一神
玉神社の
近くの東
徳久遺跡
では、炉
外濠⁽³⁰⁾・
炉内滓や
炉壁廃棄
土坑のほ
か、横口
付木炭窯

命を伊和大神や単に大神とも記す穴禾郡を拠点とする神とするが、その伝承は揖保郡や讚容郡条にも記されており、⁽³⁰⁾美作と同じく大穴持命の祭祀が播磨の産鉄地でも確認できた。

美作の肩野物部氏伝承、そして『風土記』に載る播磨と河内の両枚方里の漢人の伝承には関連性があり、その基底には大穴持命など出雲系諸神の祭祀を行う「神班物者」、そのための祭具を作る「作金者」の存在が浮かび上がる。また「作金者」は作業にあたり天目一箇神を祀っていた。

播磨の枚方里の近くを流れる揖保川の上流は、『風土記』によると穴禾郡粟御方里の金内川で鉄を産したとするなど、美作の肩野物部伝承地と同じく産鉄地でもある。近江の初期製鉄で想定されたように、⁽³²⁾中国山地でもその技術導入にあたり、漢人が関与した様子がうかがえる。漢人による佐比祭祀の広がりには倭政権による地域編成施策とも関連しているのであろう。

命を伊和大神や単に大神とも記す穴禾郡を拠点とする神とするが、その伝承は揖保郡や讚容郡条にも記されており、⁽³⁰⁾美作と同じく大穴持命の祭祀が播磨の産鉄地でも確認できた。

- (1) 片山長三「第一〇章 神社と寺院」(『交野町史』交野町役場、一九六三年)。
- (2) 拙稿「まとめ」(『森遺跡』交野市教育委員会、一九九一年)。なお『新選姓氏録』をみると逸文には枚方漢人との関連がうかがえる平方村主、河内国諸藩には漢人庄員を出自とする交野忌寸が載る。
- (3) 浅香年木「倭政権と手工業生産」(『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局、一九七一年)。
- (4) 坂江渉「『風土記』の荒ぶる神の鎮祭伝承と倭王権の地域編成」(『ひょうご歴史研究室紀要』第七号、二〇二二年)。
- (5) 長尾勝明著、矢吹金一郎校訂「苫南郡神社部中山神社条長者屋敷項」(『新訂作陽誌第一卷・西作誌』作陽新報社、一九一三年)、中山神社編「中山神社縁由附録」(『中山社資料』清文堂、一九一三年)。
- (6) 八木意知男「中山神社鎮座始末記」(『美作女子大学研究紀要第一〇号・美作短期大学研究紀要第二二号』、一九七七年)、真弓常忠「古代製鉄祭祀の神々」(『日本古代祭祀の研究』学生社、一九七八年)、真鍋成史「肩野物部と鉄・鉄器生産 社寺縁起を中心に」(『同志社大学考古学シリーズ』考古学と信仰、一九九四年)。
- (7) 拙稿「吉備の肩野物部伝承と鉄生産」(『交野の王墓と鉄器生産』交野市教育委員会、二〇二二年)。
- (8) 拙稿「製鉄工と渡来人―岡山県稼山古墳群の事例よりに」(『韓式土器研究一四』韓式土器研究会、二〇一五年)。
- (9) 志野敏夫「美作中山神社とオオナムチ・物部氏 中山神社社伝を中心として」(『岡山理科大学紀要』第四一号、二〇〇五年)。
- (10) 『記』神代巻によれば、「大国主神。亦の名は大穴牟遲神と謂ひ、亦の名は葦原色許男と謂ひ、亦の名は八千矛神と謂ひ、亦の名は宇都志国玉神と謂ひ、并せて五つの名有り。」とし、『紀』神代上第八段一書(六)によれば「大国主神、亦の名は大物主神、亦は国作大己貴命と号す。亦は葦原醜男と曰す。亦は八千戈神と曰す。亦は大國玉神と曰す。亦は顯國玉神と曰す。」とするなど多くの別名がある。そのほか、『播磨国風土記』において大穴持命は、「大汝命」や「葦原志許乎命」という記述のほか、「託賀郡黒田里」の記事に「伊和大神」の妻として「奥津嶋比売命」が登場しているが、この女神は大穴持命の妻であることから、「伊和大神」も大穴持命の別名であることがわかる。
- (11) 石田一良「三輪の神・原始信仰の生き残り」(『カミと日本文化』ペリかん社、一九八三年)。
- (12) 小池香津江「鍛冶関連遺物」(『大和・纏向遺跡』学生社、二〇〇五年)。
- (13) 森浩一「出雲郷や花の御所」(『京都の歴史を足元からさぐる「洛北・上京・山科の巻」』学生社、二〇〇八年)。
- (14) 滋賀県守山市・栗東市の一部は『和名類聚抄』で

は栗本(太)郡物部郷とされ、古墳時代前期から後期の鍛冶遺跡(金森東・阿比留・蜂屋・出庭・高野・岩畑・辻遺跡)が密集し、木製刀剣装具や韓式土器も出土している。遺跡群東側の野洲川を挟んで三上山が鎮座し、その麓の御机神社は天御陰命(天目一箇神の別名)を祀る。

(15) 村上恭通「古墳時代中・後期における鉄・鉄器生産」(『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店、二〇〇七年)。

(16) 笹生衛「古墳時代における祭具の再検討」(『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館、二〇一二年)。

(17) 村上恭通「鍛冶と祭祀―忌鍛冶の原型」(『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店、二〇〇七年)。

(18) 『白水遺跡第二・六・七次 高津橋大塚遺跡第一・二次発掘調査報告書』(神戸市教育委員会、二〇〇〇年)。

(19) 飯泉健司「播磨国風土記・佐比岡伝承考―風土記説話成立の一過程」(『古代文学』第三三号、一九九四年)。

(20) 三輪鉦士「佐比岡伝承の考古学」(『交野の王墓と鉄器生産』交野市教育委員会、二〇一二年)。

(21) 坂江涉「播磨国風土記」からみる出雲・播磨間の交通と出雲認識」(『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター、二〇一二年)。

(22) 拙稿「交野における古墳時代の鉄器生産」(『交野の王墓と鉄器生産』交野市教育委員会、二〇一二年)。

(23) 前掲註(20) 文献。

(24) 拙稿「鍛冶関連遺物」(『考古資料大観第七巻』小学館、二〇〇三年)。

(25) 田中史生「ミヤケの渡来人と地域社会―西日本を中心に」(『日本歴史』第六四六号、二〇〇二年)。

(26) 前掲註二〇文献。

(27) 依国一「古来の砂鉄製錬法」(丸善、一九三三年)。同書には天明四年(一七八四)に伯耆国日野郡の下原重仲が記した『鉄山必要記事(鉄山秘書)』が掲載され、天目一箇神は第一巻第一節「金屋子祭文」、第三節「鉄山内外に祭る神の號」、第四節「新鉄山たたら祝時の鏡餅の供え方」、第六節「金屋子神のご神体の事」に記されている。

(28) 村上泰樹「播磨北西部の古代鉄生産研究の現状と幾つかの視点」(『ひょうご歴史研究室紀要』第三号 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室、二〇一八年)。

(29) 田代克己「天目一箇神」(『講座日本文学 神話下』至文堂、一九七七年)。

(30) 古市晃「伊和大神とは何か」(『播磨国風土記』の古代史) 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室、二〇一二年)。

(31) 土佐雅彦「播磨の鉄」(『風土記の考古学』播磨国風土記』の巻) 同成社、一九九四年)。

(32) 森浩一「滋賀県北牧野製鉄遺跡調査報告」(『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部文化学科、一九七一年)。